
大好きな君へ

乃井村つばさ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大好きな君へ

【Nコード】

N75750

【作者名】

乃井村つばさ

【あらすじ】

誰もが憧れる君に、素敵な片思いをしています。叶わないって知ってるけど、嫌いにはなれません。

純粋な男女の片思いストーリー。きっと、君に伝わるはず。

NONOKA's 片思いの苦悩

恋にきっかけがあると、誰が決めたんだろう。
それとも、そう思っていたのは私だけだったのか。
私、桜田ののかの恋に、きっかけなんて無かった。

私の耳は彼の声だけを聴き
私の目は彼の姿をさがした。

今日も、あなたに片思い。

ドキドキする。

「ほんとごめん。大丈夫だった？」

私の方を見てすまなそうに謝るのは、私の大好きな人。 かしわぎしよった 柏木翔太
くん。

ただ廊下で肩がぶつかってしまっただけなのに、そんなに謝らな
くたって私は怒らない。

「ううん。大丈夫だから……こっちこそ、ゴメンナサイ」

私は柏木君と目を合わせないように頭を下げた。

「悪いのは俺だから。ごめんね、じゃ！」

そう言って私に背を向けた。

終わってから後悔する。

(もつと明るく接すればよかった……！ あれじゃ、柏木君絶対気を悪くしたよ。目だつてロクに合わせられなかったし、下向いてばかりだった……！ 私、最低)

同じクラスだから、教室に戻って謝ることもできるけど私にはそんな勇気も無い。そんなことを考えながら教室へ向かう。

柏木君は、きつと部室に向かったんだ。

彼はテニス部の部長だった。引退した今でも後輩の朝練を頼まれて見てあげているらしい。高校3年生。もう、残りの学校生活も四ヶ月を切った。

今までに彼と交わした言葉は全部「ごめん」という言葉だけ。

仲良くしたことなんか一度も無い。私は、なんて根性なしなんだろう。

教室に入るとみんなが挨拶してくれる。

「ののか！ おはよう」

「相変わらず早いね、おはよ」

このクラスの女子は、ほかのクラスなんかとは比べ物にならないくらい良い子ばかり。私には自慢のクラスだ。

私は乱れた髪を整えるために、お気に入りの黒ぶち眼鏡をはずした。眼鏡はどんなものでも似合うと自負している。

「ねえ、やっぱりののかは、目鼻立ちがはっきりしてるし、きれいなパッチリ二重だし」

眼鏡取ったほうが絶対可愛いよね。美人さんだよ」

友人の、深森友里ふかもり ゆりが言った。

「なんで、眼鏡はずさないの？」

「だって、コンタクトなんて怖いじゃん。私、眼触れないの。」

昔、コンタクトの練習してて、目玉触ったら貧血起こしちゃってさ
うそ、と友里がけらけら笑う。

「それでそれで？」

「眼科の先生にベツトに運んでもらって、寝てた。」

倒れるなんて、滅多に無い。コンタクトは、もっと大きくなったら
でいいんじゃない？ って言われた」

あれは高校一年生の頃。

友達が出来なくて、イメチェンしようと考えていた。

きっと、眼鏡がいけないんだって。そう思ってた時期。

「まあ、今となっては、眼鏡好きだけだね」

……でも。

眼鏡が好きなのは、なんでも眼鏡のせいに来るから。

きつときつと、私が柏木君に振り向いてもらえないのは、眼鏡を
かけてるから。

眼鏡を取ったら、きつとみんなが振り向いてくれる。

眼鏡だからだよって。

言い聞かせられる。

柏木君は、いつも誰かに話しかけられていた。人気者。誰にでも分け隔てなく接して、みんなを気にかけてくれて。話題にも退屈しない。頭も良いみたいだし、テニス部部长スポーツもできる。

こんな完璧な人、嫌いな人なんていないはず。

私も……

「ののか、おはよう」

遅刻ギリギリで来たのは、仲良しの谷村由乃ちゃん。

優しくて真面目な友里とは違い、由乃ちゃんは不良娘。髪は明るいし、ピアスは両方合わせて5つも開いてる。でも、大人っぽくてさばさばしてる子。

友里と私と三人で仲が良いのは、きつと釣り合いが取れてるからだろう。

「由乃ちゃんが遅刻しないで来るなんて、珍しいねえー」

「でしょう？ まあ、あと数ヶ月のクラスだし。欠課時数が多すぎて、卒業できなくなったら困るからさあ」

由乃ちゃんは、そう言っただけで席に着いた。

担任の山崎が、軽く連絡事項を言うだけで朝のHRが終わった。

先生が教室を出て行くと、柏木君が教卓に立った。

「ちょっと話があるんで、聞いて下さい」

ざわついていた教室が少し静かになる。

「えーっと、何人かと話し合ったんだけど、先週の文化祭の打ち上げをやり直す。後ろに詳細と出欠書く紙貼っとくから、今日中に書いて下さい。なるべく参加するように！」

柏木君が話し終わると、騒がしくなる。

「どーする、ののかは行く？」

由乃ちゃんが言った。

「由乃ちゃんたちは？」

「あたしと友里は行くよ。柏木と計画立てたの、あたし達だし。幹事っぽくなっちゃったからさ」

由乃ちゃんは、めんどくさそうに言った。

「いつの間に……」

「文化祭終わってからさ」

由乃ちゃんが言った。

「そうそう。ののかったら、帰るの早いんだもん」

友里は苦笑いした。

ああ。あの時か。

用事はなかったが、早く帰りたい気分一人で帰ってきてしまった。

心の中で後悔する。

(どうして、帰っちゃったんだろうっ)

「谷村と深森は行くよな」

柏木君の声が聞こえて顔をあげた。すぐそばに、柏木君がいる。

「もちろんよ」

由乃ちゃんが答える。

「だよな。幹事なんだから」

柏木君が笑う。

すごく、かつこいいい。

じっと見つめていると、視線に気づいた彼が笑うのを止めた。

「……桜田も…来るでしょ？」

柏木君が顔を少しだけ赤らめていたのは、私の気のせいかな。

ShoTas 秘めた想い

「……桜田も……来るでしょ？」

俺、柏木翔太は声が掠れるのが分かった。

桜田ののかは、まだじつと俺を見ていた。照れずには、いられないだろう。

「……俺の顔、なんかついてる？」

思わず言ってしまった。

すると桜田は、はつとしてからブンブンと音が鳴るんじゃないかと思うくらい首を振った。

「……ち、違うのっ！ ごめん、ぼーっとしてて」

「ののかは不思議ちゃんだよ。口、空いてたよ」

谷村由乃が桜田の髪をぐしゃぐしゃとした。

「え、えー！？ やだ……」

桜田は頬に手を当てて俯いてしまった。

それっきり桜田は目を合わせてくれず、悪い事をしたと思った。

桜田が男と話した所を、あまり見た事がない。

彼女は自分から男に話しかける事は一切しないようだった。そのせいで、クラスの男からは近寄りがたい真面目な子だと思われる。どうせ、話しかけても軽くあしらわれるに決まってる、と恋を諦めるヤツだった。

でもあと少しの学校生活。

俺も男だ。

自分の気持ちを伝えたいと思う。

どうか、下を向かないで。

目をそらさないで。

桜田が大好きです、と。

NONOKA's 君からの手紙

私はため息をついた。

放課後まであと二十分。退屈な授業が終わるのが、あと二十分。

あいうち かなな
愛内神那さん。

よく柏木くんと話しているのを見かける。

愛内さんは、目がくりくりつとしてて、動物に例えるとリスって感じ。とにかく、同性の私から見ても可愛い。

(私が男子だったら、好きになっちゃうよな……)

柏木くんは、愛内さんと話す時には、よく笑ってる。何を話しているかは分からないけど、私だったら何を話せばいいのかも分からない。

愛内さんが、うらやましかった。

柏木くんは、愛内が好きなのかな。

2人は、もう恋人同士なのかな。

柏木くんの事を考えると、胸が締め付けられます。それどころか、爪の先まで甘く疼きます。

大好きで、大好きで、大好きで。

でも、追いつけないのかな。

すると、コンッと机に丸めた小さな紙が落ちる。送り主を探してキョロキョロと辺りを見渡した。

心臓が止まるかと思った。斜め前の席。

柏木くんからの初めての手紙だった。

(し・ず・か・に)

柏木くんは唇に人差し指を当てて、口を素早く動かした。はっと

して口を閉じる。

紙を開く指が、妙に震えた。震える指がそつと紙を開く。

(……あ)

そこには丁寧な字で、こう書いてあった。

『さつきは、ゴメン』

さつき？

……ああ、私が柏木くんと目を合わせなかったからだ。

怒ってなんかいないし、そんなつもりじゃなかったのに。それだけが書いてあった。

柏木くんからは、謝られてばかりだ。怒ってなんていないのに。

私はノートの端を破って返事を書いた。

『怒ってないよ。恥ずかしかっただけ。ごめんね』

私は柏木くんの机をめがけて投げた。

良かった。ちゃんと届いた……

ホッとしていると、

(ナイスコントロール)

柏木くんは、また唇を動かして私に言った。笑いかけられて、頬が熱くなる。

すると、すぐに返事が返ってきた。

『打ち上げ絶対来て』

それだけが書かれた紙。

柏木くんは、どんな気持ちで書いてくれたんだろう。彼の丸い文字を眺めていると、柏木くんと目が合った。じつと見つめる彼に、私は照れながら頷いた。

返事なんか描けなかった。私は、愛内さんのように、気の利いた言葉なんか思いつかないよ。

Shota's 好きな人

彼女は分かりやすい。

友人の深森や谷村たちと話しているのを見てみると、けらけらと良く笑うし、落ち込んでいる時は暗いオーラを身に纏っている。

ふわふわで長い髪は、文化祭が終わると鎖骨あたりまでに切りそろえてしまった。癖っ毛で茶色がかった髪が桜田にはよく似合っていた。

今日の朝、文化祭の打ち上げの出欠の紙を貼ったとき。

「……柏木くん」

ざわついた教室の中、誰かが俺に話しかけた。

「打ち上げ、結構行く人いるね」

彼女は、クリクリとした目が印象的な愛内神那。

「……ああ。愛内も来るんだ」

「当たり前じゃん。柏木くんが来るんだもん」

「……愛内が来るんなら盛り上がるな。楽しみにしてるよ」

「うん！ じゃあ、また明日」

そう言い残して彼女は教室を出て行った。

「愛内さん、柏木と仲良いよね」

「……谷村」

気づけば今度は谷村が後ろにいた。

「……アンタさ、ほんと、誰にでも優しくするよね。それが柏木の良いところでもあるんだけど……誰にでも優しいのって、誰にも優しくしないのと一緒に。そんなんじゃ、ののか、誰かに取られちゃうんだから。しっかりなさい、王子様！」

谷村は俺を見た。

……。

「え、えっ！？ おまつ……なんで桜田……え？ なに……？」
顔から火が出そうだ。俺は、そんなに分かりやすかったのかと思
った。

谷村とは中学から同じクラスで仲は良かったが、お互いの入り込
んだ話なんてした事もない。

すると谷村は焦る俺を見て、ふふつと笑った。

「クラスでは、優しく完璧な王子様だと思われているけどね、私
にとったら可愛いお子様よ。アンタの事なんか、手に取るように分
かる」

むっとして赤くなった俺に「でも」と谷村は声をひそめた。

「ののかは気付いてもいないわ。一ミリもね。さあて、王子様がど
うやって、私たちのお姫様をモノにするのかしら」

おまえなあっ！ と俺が言うのも聞かず、ひらひらと手を振って
いってしまった。

谷村には叶わない。彼女は俺なんかよりも、遥かに先を歩んでい
た。

それより。

桜田は気づいていない。まあ、そうだろう。だって俺は、そんな
素振りは見せまいと生きてきた。

桜田は、好きな人がいるのだろうか。

授業中、もんもんとした気持ちかたまらなくなって、彼女に小さ
な手紙を書いた。

返事なんて期待してなかった。いつもみたいに、俯いてしまっ
じやないかと。

でも。笑ってくれた。少しでも、俺の事を想って。

NONOKA's 告白

「ののか、打ち上げくるんだ」

友里は言った。

「意外だなあ。ののかって結構、わいわいするの苦手ですよ。なんていうか、引きこもり？」

「ひどいなあ。私だって、行きたいもん」

さっきの柏木くんとの手紙の事は言っていない。私が柏木くんを好きだって事も言っていないから。早く打ち明けたいけど、恥ずかしいでも、言わなくちゃ。友達なんだから。

「あ、あのね！ 友里、由乃ちゃん」

ん？ と二人が見つめる。

「お話がありました……」

真っ赤になつた顔を両手で挟んで冷ます。

「あらあらあら。ののかのお話して何かしら。なんでも言いな」

由乃ちゃんは、なにか面白いものを見つけたように、にやっと笑った。私は意を決して口を開いた。

柏木くんに片思い中です、と。

すると、二人はしばらく何も言わず、啞然としていた。

「ののか……由乃ちゃんと私が、気づいてないと、思ってたの」と。その言葉に、今度は私が啞然とした。

「知ってたの？」

「大丈夫、柏木の事、否定しないよ。ののかと柏木、いいと思う。」

私、応援するよ」

由乃ちゃんは言った。

「打ち明けてくれて、ありがとう」

二人は、にっこり微笑んだ。

放課後になり、柏木くと目を合わせる事も言葉を交わす事もなく、帰路についた。

明日は打ち上げ。休日も彼に会えるのかと思うと、わくわくするし、ドキドキもした。

お話、できるといいな。

「 ののかちゃん」

「 あ、愛内さん」

校門を出た所で、後ろから声をかけられた。

「 やだ。神那って呼んで」

「 神那、ちゃん？」

「 うん、ありがとう」

そう言うと愛内さんは、私の横を歩き出した。

「 あ、神那ちゃんも家こつちななの？」

「 まあね」

曖昧に答えて、にこっと笑った。

「 ねえ、明日打ち上げ行くの？」

「 行くよ。カラオケらしいね」

カラオケは好きだ。歌うのが好きだけど、盛り上がるわけじゃない。だから、明日の打ち上げでは歌うつもりじゃなかった。

「 楽しみだねー！ 柏木くんも何か歌うのかな」

声を小さくして愛内さんは言った。恋する女のそれだ。

「 …… 神那ちゃんと柏木くんは恋人同士なの？」

すると、愛内さんは少し頬を染めて曖昧に首を傾げた。

「 …… そうね」

ああ。

やっぱり、二人はお似合いすぎる。横顔をそっと盗み見る。大きな目と長い睫毛。目の上でぱっちり切りそろえられた前髪に、綺麗な長い髪。

「 あ、家ここだから」

私は、いつの間にか辿り着いた家の前で手を振った。

「そっか。じゃあ、また明日ね！」

愛内さんも手を振って、さっき来た道を戻っていく。確か、愛内さんも柏木くんや由乃ちゃんと同じ中学。

だとしたら、家は逆方向なんじゃ……。

頭にハテナマークが浮かんだが、着替えている間に忘れてしまった。

明日、楽しみだな。

楽しみにしていた日に限って、風のごとく過ぎて行ってしまふ。

私は、メロンソードをちびちびと飲みながらみんなの歌を聴いていた。みんな、楽しそう。

柏木くんも、楽しそうにみんなに囲まれて笑っていた。

「ののか」

由乃ちゃんが手招きした。

そばに寄ると「柏木」と柏木くんも呼んで隣に座るように促した。

「よよよ、由乃ちゃん？」

「まあまあ、座んな。あたしはちょっと、ト・イ・レ」

「由乃ちゃん！」

「谷村！」

私達を無視して彼女は部屋を出て行った。

「……歌わないの？」

柏木くんは、私の方を見ないで言った。

「うん。私が歌ったら盛り上がらないので」

すると柏木くんはデンモクを私に渡した。

「歌って。気にしないでいいから。き、聴かせてほしい」

彼は、やっぱり向こうを向いていたけれど、きつと真っ赤な顔をしてると思った。そんな彼に、私は大好きなバラードナンバーを入

れた。

柏木くんの前で、歌うとは思わなかった。だって、この歌そのまま、私の気持ちなんだから。

ShoTas 聞きたい秘密

谷村が俺を呼んだ時、ドキツとした。桜田がいたから。

谷村が気を利かせて席を立ててくれたのは有り難かった。桜田は、曲の予約を入れるとまたメロンソーダを飲んだ。

「俺、飲み物取ってこようか」

彼女のグラスのメロンソーダが少なくなっている。ドリンクバー制なので、お代わり自由だ。

「うっん。私行ってきます」

桜田は席を立った。

「え、お、俺もっ」

そうして2人で部屋を出た。 会話が続かない。

すると彼女は言った。

「あの……」

えらく小さな声だ。

「ん？」

「昨日、手紙ありがと。なんか、柏木くんに勘違いされやすいのかな。私、柏木くんに怒った事なんてないっていつか……」

桜田は、俺の目をみて笑った。

「だから……もう謝らないで」

心臓が潰れるんじゃないかと思った。

桜田の笑顔が可愛すぎて。心が綺麗すぎて。

「 ののかちゃん」

そう呼んだのは俺では無かった。

「愛内」

「神那ちゃん」

「こんな所にいたの。探したよ！ ののかちゃんの曲、もうすぐだから、早く戻った方がいいよ」

にっこり笑いかけられて、桜田は頷いた。

「わざわざありがとう」

桜田は部屋へ戻っていったけど、

「柏木くん」

愛内は俺の前に立った。

「ちよつと話があるの」

彼女は、少し傷付いた目をして俺を見上げた。

「話？ どうした？」

「それがね……言い難いんだけど……」

「柏木！ お前どこ行ってたんだよ」

同じクラスの黒田が肩をくんで小さな声で話した。

「桜田が歌ってたぜ、恋のうたを！ 超上手かった！ 惚れそうだったあ」

その言葉に顔が紅くなる。

「……冗談言うな」

「あははっ！ 冗談に決まってる。それにしてもお前何処行ってたんだよ」

「別に、飲み物取りに行ってたんだよ」

そう、ただそれだけなら良かったのに。俺は、楽しそうに笑う桜田を盗み見た。

愛内は言ってた。

ののかちゃんって、年上の男性と付き合ってるっばいね。私、この前見ちゃった。……柏木くんも、気を付けて。あの子、二股かけてるみたいなの。可愛い子だとは思ってたけど……まさかそんな子だとは、ね。

別に信じた訳じゃ無かった。

でも、少し寂しかった。

本当に楽しかった。

私は由乃ちゃんと友里、柏木さんと黒田くん、誰もいなくなった部屋の忘れ物の確認をしてから、店を出た。私の家だけ、逆方向だからひとりになる。

すると由乃ちゃんは言った。

「柏木、送ってあげなよ」

え！？ 私は驚いた。

由乃ちゃん、今日はいつもにも増してお世話焼きだ。

「だ、大丈夫です。すぐ着くから」

「何言ってるの！ ののかの家、歩いて二十分くらいかかるでしょ」友里が言った。

「柏木、自転車なんだし、いいよね」

「いいよ。桜田、行こう」

「え……う、うん」

じゃあね、と手を振って歩き出した。

「桜田」

柏木くんは言った。

「今日はありがとう」

「こちらこそ」

「……あのさ」

彼は言った。

「楽しかった？」

私は何度も頷いた。

「う、うん」

「来て良かった？」

もう一度頷く。

「うん。柏木くんが来てって言うてくれたから、すごい……嬉しか

「つたです」

私は素直にそう伝えた。夜の暗がり、私の背中を押してくれたみたいに、素直に言えた。

……今日は星が綺麗だ。彼と見上げる初めての夜空が星空で良かった。

「ただいま」

私はリビングのドアを開けた。

「ののか、連絡くれれば迎えに行ったのに。心配したよ」

「ごめん、遅くなっちゃった」

私はマフラーを外してソファに座る。

「いいんだよ。ただ、可愛いのが悪い男に狙われてないかと、俺は心配だ」

「裕史兄ちゃん……」

すると携帯が鳴った。

「あ、涼くんだ」

私は通話ボタンを押した。

『こんばんは、ののかちゃん』

「どうしたの、こんな時間に」

『こんな時間？ じゃあ聞くけど、なんでなののかちゃんは、こんな時間まで連絡をくれなかったんだ』

そして、はつとして涼くんは言った。

『裕史ちゃんとデートしてたんだね？』

始まった……

『ズルいじゃないか！ 裕史くんとは、一昨日あたりに出掛けてただろう。俺は一週間、ののかちゃんと出掛けてない！』

「違うの、今日はクラス会で……」

弁解も虚しく、半ば強引に次の予定を入れられてしまった。

裕史兄ちゃんも、従兄弟の涼くんも、もう二十三歳だというのに……シスコンというやつだ。

私に好きな人がいる、なんて言ったら柏木くんを殺しかねない。私も私で、今まで敵しく突っぱねていないから、どんどんエスカレートしていくのだけど……。そろそろ終わりにして欲しい。

いつもと同じ授業風景。何にも変わらない。

変わっているのは、私の携帯が鳴り止まないこと。涼くんだ。

今日は彼と出掛ける日。きつと素敵な夜景の見える高級フレンチレストランで食事をするんだ。

『今日は楽しみだ』

たったそれだけのメールが、何通も送られてくる。サイレント着信が十分置きに光ると、うんざりする。

とんとと机に丸めた紙が落ちた。ドキッとして柏木くんを見ると、いつかのように唇に指を当てて、笑った。

『どうしたの？』

私は驚いた。

彼を見ると、真剣にノートを取っている背中だけが見えた。

『ちよっと、いろいろ』

私はそう書いて柏木くんに渡した。理由なんて言ったら、彼はどう思うかな。

嫌われたりするんじゃないかって思うと、そう書かずにはいられなかった。

柏木くんの向こうを見ると、愛内さんが見えた。

二人は恋人同士なの？

……そうね

彼女は笑った。

柏木くんは、愛の言葉を言われたのかな。好きだよって、抱きしめたのかな。

すると柏木くんから手紙の返事が来た。

『今日、空いてる？』

彼の背中からは真意は読み取れない。

ShoTas 苦惱

可愛いカフェを見つけた。木で出来ていて、隠れた所にウサギやリスの置物がある。なにより、そこで淹れてくれるコーヒーが美味しい。

桜田に教えてあげたいと思った。
でも。

『ごめんなさい。今日は予定があるの』

彼女からの返事は、Noだった。ふと、愛内の言葉を思い出す。
年上の彼と付き合っているらしいよ

その言葉が本当だとしたら、今日はきつと彼と会うのか……
考えすぎだと思っても、何も知らない俺は、想像するしかない。

でも、桜田はさつきから、大きなため息ばかり吐いていた。ちよつと、いろいろ あるそうだが、教えてはくれないらしい。

『そっか。じゃ、また今度』

そう返事を書いて、俺は机に突っ伏した。考えたって、分からない。
い。

NoNoKa's あなたの手

放課後がやってきた。

私は教室の窓から、赤いスポーツカーが学校の前に止めてあるのを見た。学校の生徒に、私とその車に乗り込むのを見られるのはやばい。かといって、もう校門には下校する生徒がたくさんいる。

「はあ」

大きなため息をついて私は教室を出た。

そのまま赤いスポーツカーを通り過ぎようとした。

「ののかちゃん！」

その頼りない声に脱力する。無視しようかと思ったが、これ以上大声で名前を呼ばれる方が恥ずかしいので止めた。振り向いて私は笑顔を作った。

「ごめんなさい。涼くん。制服が汚れちゃって、着替えないと出掛けられないの。だからちよつと待つ……」

「可哀想に。着替えなんて気にする事はないよ。途中でお店に寄って、君に似合う服を見立ててあげる」

彼は私の腕を掴んだ。

「ちよつと待って！」

私は振り払って俯いた。

「えつと……」

「どうしたんだ、ののかちゃん」

もうだめだ、と思った。明日には噂されてる。『桜田ののかは年上の針金のような痩せ男と付き合っている』って。柏木くんにも……すると誰かの手が私の腕をもう一度つかんだ。

顔を上げると、傷ついた顔をした柏木くんが有無を言わず引張っていく。

「……え、ちよつ……」

何かなんだか分からなかった。

後ろを振り返ると、情けない涼くんの顔と、その後ろに目を見開いた愛内さんの姿があった。

S h o T a · s 気持ち

「ねえ、言ったでしよう？ ののかちゃんは、付き合っている人がいるの」

愛内がそう言った時には、何も考えられなくて、身体だけが勝手に走り出していた。

「はあっ……はあっ……」

桜田の腕を掴んだまま、公園まで走った。針金男の声も聞こえない。

「柏木、くん……っ」

彼女は立ち止まって切れた息で言った。

「……腕、離して」

はつきりと聞こえた。

「何処へも行かないから……」

はっとして俺は手を離れた。

「……」

沈黙が続いた。

2人の息が整った頃、桜田は口を開いた。

「愛内さんは、いいの？」

「え？」

「恋人同士なんでしょう」

彼女の言葉に面を喰らった。

「……桜田」

俺は言った。

「桜田がさつき男の人と話してたとき、すごい、胸が苦しかった」
「……え」

「好きな人じゃないと、こんな気持ちにはならない」
俺は言った。

「あの人と付き合ってるの？」

NONOKA's 大好き

彼の言葉に耳を疑う。

あの人と付き合ってるの、だって。

「……そんな訳ないよ……」

私は消えてしまいたい気分には駆られた。柏木くんは、じつところを見ています。

「お願いだから……柏木くんは……私が誰かの事好きだって思わないで……」

「……桜田」

「知らないでしょ？ ……私、愛内さんに、いっぱい嫉妬してるんだよ。愛内さんだけじゃない。由乃ちゃんにだって……」

私は小さくなる声を絞り出した。何がなんだか分からない。

「……どうしてだか分かる？」

いつもより饒舌な自分がいる。今から言おうとしている言葉に、すこし躊躇った。

「……私ね、柏木くんの事……」

「……桜田……」

柏木くんに遮られた。

手が震える。本当に、何を言おうとしているんだろう。慌てて、冗談だって笑おうとする。

すると柏木くんは、言った。

「好きです。大切にしているから……桜田の事……幸せにするから」

彼は真っ直ぐに私を見て言った。これが告白だと分かるまで、ずいぶん時間がかかった。

「ねえ……返事は……？」

吐いた息が白くなる。私は、それを何度か確認して思考をフル回転させた。

「……好き」

私は、かすれる声を絞り出した。

「……気の利く女じゃないので……どんな風に答えればいいか、分かんないよ……」

うつむく私に、柏木くんは近付いてそっと抱きしめた。

「……十分すぎるよ」

信じられない。あんなに焦がれた彼の腕の中に、私がいる。両想いになれた事だけでも信じられないのに、今の状況は夢にも思わなかった。

「……桜田」彼は言った。「お願いだから、俯かないで。ちゃんと、いつも笑って」

私の乱れた髪を優しくかきあげて、言った。

「いつも笑っていて」

私は、涙で滲む彼に笑いかけた。

朝、携帯の音で目を覚ました。

柏木翔太、という画面に映された文字に、昨日の出来事が本当だったのだと気づく。

『今日、暇なら会えない?』

男の子らしいぶっきらぼうなメールだった。

私はすかさず、うん、と返信した。携帯が鳴るのが楽しみだ。この携帯の向こうで、柏木くんもドキドキしてくれているのだろうか。

『今日、提灯もみ祭りなんだ。近くの神社で。たくさん屋台も出るから、行かない？ 人混み嫌いかな？』

彼からのメールに一気にテンションが上がる。

『私、チョコバナナ食べたいな』

そう返信すると、すぐに彼からメールがきた。

『じゃあ、6時にあの公園に。ちゃんと、あつたかくして来てね』

私は携帯を閉じて、抱きしめた。

神様、嘘なんかじゃないのよ。柏木くんは、私の恋人になったのよ。

窓の外は爽やかな晴天だ。

私は知らなかった。そのお祭りは、地元の学生がたくさん来る事を。彼女が、来る事を。

NONOKA's メール

朝、携帯の音で目を覚ました。

柏木翔太、という画面に映された文字に、昨日の出来事が本当だったのだと気づく。

『今日、暇なら会えない？』

男の子らしいぶっきらぼうなメールだった。

私はすかさず、うん、と返信した。携帯が鳴るのが楽しみだ。この携帯の向こうで、柏木くんもドキドキしてくれているのだろうか。

『今日、提灯もみ祭りなんだ。近くの神社で。たくさん屋台も出るから、行かない？ 人混み嫌いかな？』

彼からのメールに一気にテンションが上がる。

『私、チョコバナナ食べたいな』

そう返信すると、すぐに彼からメールがきた。

『じゃあ、6時に迎えに行くよ。ちゃんと、あったかくして来てね』

私は携帯を閉じて、抱きしめた。

神様、嘘なんかじゃないのよ。柏木くんは、私の恋人になったのよ。

窓の外は爽やかな晴天だ。

私は知らなかった。そのお祭りは、地元の学生がたくさん来る事を。彼女が、来る事を。

「桜田！ こつち」

柏木君は、私の姿を認めて手を振った。私も小さく手を振り返す。「ごめんね。遅れちゃって」

私は、頭を下げた。すると柏木君は私の頭の上に、ぼんつと手をやってから

「たったの十分。なんてことないよ。それに、桜田を待ってるんだと思つたら、苦じゃなかった」

行こう、と左手を差し出される。私は戸惑いながら指先を少しだけ握った私に柏木君が笑う。

「違うだろ。こう」

そういつて、指と指を絡ませる。

「冷たい手。大丈夫？ 寒くない？」

柏木君が腰をかがめて覗き込んでくる。

「うん。大丈夫」

本当は、冷たいのは手だけで、体は恥ずかしくて暑いくらいだった。

「あ、れ。柏木と桜田じゃん。なんだよ、付き合ってるの？」

クラスの男子に見つかつて、ひやかされる。

「でもまあ、学校の前で、あんな修羅場を見せつけられたらなあ。そつえば、愛内神那、柏木が桜田連れてどっか行つたとき泣いてたけど大丈夫だったかな」

その言葉に、柏木君を盗み見る。

思つたとおり、少し苦い顔をしていた。愛内さん、柏木君のこと好きだったみたいだし。柏木君も、愛内さんとはすごく仲良かったみたいだし、どうなんだろう？

「ねえ、柏木君」

私は言った。

「愛内さん、来てないのかな」

え、と言葉を失った彼に、握った手の力を強めた。

「そういえば、私たちが……その、付き合ったこと……まだ言っていないんじゃないかな、と思って」

「教えたほうがいいと思ってる？」

柏木君は言った。

「思ってる、よ。だって、多分だけど……愛内さん、柏木君のこと好きだったんだと思うの。好きな人に、隠し事されるのって、つらいよ？ 他人伝えに、そういう大切なこと聞かされるのって、もっとつらいんだよ。だから、せめて、柏木君の口から……」

柏木君の背のずつと向こうに、愛内さんの姿を見つけた。

私はすつと手を離して、柏木君の背中を押した。

「大好き、だよ」

柏木君は、頷いて、彼女の元へ行った。

「愛内。来てたんだ」

俺は出来るだけ明るく言った。

「来てたよ。柏木君に会えるかも、と思ったから」

そういつて、愛内はため息をついた。

「正直、あの時柏木君が、ののかちゃんのところに行くなんて思っ
てなかったよ。びっくり。でも、柏木君は、そうしたかったんでし
よ。今日も彼女と一緒に来てるみたいだし、上手く行ったんだ。良
かったね」

「そのことなんだ」

俺は、まっすぐ愛内を見た。

「俺、桜田と付き合うことになったから。それを、愛内に伝えたくて」

「うん。ありがとう。柏木君の口から聞けて、吹っ切れたような気がする。彼女のこと、大好きなんですよ」

俺は頷いた。

「大好き、だよ」

そういうと愛内は、ふっと笑った。

「はいはい。ごちそうさま。もう行って良いよ。ごめんね、迷惑かけて」

彼女は俺の背中を押した。

愛内のその言葉に、俺は振り返る。

「俺、愛内のことも、気持ちも迷惑だったなんて思っていないからそれだけ言っつて、歩き出した。」

「そんなこというから、好きになっちゃったのよ」

と、そんな声が背中から聞こえてきたような気がした。

「よかった。愛内さん、笑ってた」

私は、柏木君に甘酒を渡した。

「ありがとう。桜田」

え？ と聞き返すと柏木君は笑った。

「好きになってくれて、ありがとう。ずっと、大切にする」

その言葉に、私は顔が熱くなる。

「だから、ずっと一緒にいような」

空いた手をつないで、力をこめた。

「柏木君、大好き」と。

NONOKA & amp; SHOTA 手をつないで (後書き)

ありがとうございました。

かなり不定期&意味不明な点もありますでしょうが、初作品なので、お許しください。

他の作品は、もう少し良くなっていると思うので、ぜひお楽しみください。

最後まで読んでいただき、ありがとうございます。

読みました、だけでも、感想に残していつてくださると嬉しいです。本当にありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7575o/>

大好きな君へ

2011年2月18日10時10分発行